

## 沙羅の樹文庫だより



今年初めて文庫、水仙が咲いていました、清楚に。

## 日新日々新日新

(日に新た 日に新た また日に新たなり)

終生現役だった杉内雅男さん(囲碁棋士9段) 座右の銘

## 雪がふると聞いたような・・・

それぞれの屋根に雪ふる  
それぞれの人のために 雪のふりつむ  
(福島・美原凍子さん)

雪を愛で雪を嘆いて雪けなす  
雪ではじまる雪国  
(富山・徳永光城さん)

～ある日の「朝日歌壇」より～

毎日が、何ごともなく過ごせる幸せを感じられる日々でありますよう。(さ・ら)

## ★開館日は通常は第3日曜と前日の土曜です★

2018

- ◆1月は通常20日(土)、21日(日)の両日
- ◆2月は通常17日(土)、18日(日)の両日
- ◆3月は通常17日(土)、18日(日)の両日
- ◆4月は通常14日(土)、15日(日)の両日
- ◆5月は通常18日(土)～21日(月)の4日間

## ★5月スペシャルイベントタイム

藤田浩子さんによる

&lt;子どものためのおはなし色々ススペシャル&gt;

今年は、子どものための「若葉のころのおはなし会」を5月6日(GW最後の日)開催します。文庫の日とは違いますので、お間違いのないように。詳細は追ってお知らせします。

## 通常の文庫の時間

土曜は14:00～17:00 日曜は10:00～15:00

☆毎月開館日の日曜には、10:30～11:30

子どものための小さなおはなし会があります。

## ★おはなし沙羅の勉強会

毎月開館土曜日11:00～13:00

よみかせの練習・本選の勉強にもどうぞ!



皇居二重橋 外国人姿多し。ジョギング中・西村夫撮影 18.1.3

沙羅の樹文庫 0557 -51-3737  
http://www.saranokibunko.com

文庫あれこれ◆芥川賞、直木賞が発表。えっ、ついこの間も。と、月日が走っているのか、賞の回数が多いのか。今月、それと知らずに『おらおらでひとりいぐも』(若竹千佐子著)を入れました。直木賞の『銀河鉄道の父』(門井慶喜著)ID17258は昨年11月に在庫しています。お読みください。◆『老人の取り扱い説明書』(SB新書)ID17343、ついにこんな本も。老いた親の異常な行動に困ったらこんなふうに対処したら、と親切な本のように。老いつつある我らは、これを逆手に見返してやろうではありませんか。◆読書嫌いな夫が年末から年明けにかけて3冊の新書(夜中のラジオで紹介されたらしき)を読みました。みんな太平洋戦争関係のもので。感想は今イチだったようですが、上下本1タイトルしか読めなかった私は、えらい!と褒めてあげました。◆いつも上滑りな人生を生きている私ですが、時折あっ?!と思うことがあります。——多様化する社会で人間の生は、社会性、共同性前提で、「何かを成し遂げようとするれば、一定期間、特定の他者との濃密なコミュニケーションが必要であるが、その一つの関係性にのみ込まれないためには、関係を複数化し、それぞれの分人(ひとりの人間はそれぞれ違う相手に見せる顔が違う)を相対化するしかない。」そして、個々の関係を持続させるか考えつつ、複数の分人を生き、自分の人生の主人公ばかりを願うのではなく、他人の人生の中でよい脇役であることも、生への充実感へとつながる…。——と、平野啓一郎のことば(『わたしとは何か』)を、ある日の朝日<文化・文芸>欄で紹介していました。日頃つかえていたこと(私とは?)が、少し腑に落ちた気がしました。◆また、<ものしりミニ講座>欄に「鎖国下の長崎交易と鄭氏親子」という記事もつけました。息子(もういいおじさんです)はその鄭氏の息子鄭成功(<国姓爺合戦>主人公)の名を冠する大学の研究者ですが、暮れに小1の孫息子に日本の冬至の習慣を伝えたところ、台湾では湯圓というおだんごを食べるんだよ、だから、お汁粉を買ってきて紅豆湯圓を作ったよと教えてくれました。『バテレンの世紀』(渡辺京二著)を入れました。◆1月もあつという間に2月です。本年もよろしくお祈りします。皆さんによい年で、よい本に巡り合えますよう。寒いです。風邪召さぬよう。さあ18年の文庫開きです(西村)。

2018年の年頭に思ったこと  
—年賀状のこと—

森・林・浴

年賀状で悩むことがいくつかあります。

実は私もずっと以前は毎年150枚位年賀状を出して、書くのに結構大変な時間をかけていました。全部を手仕事にすると、えらい時間がかかって大変だし、途中のミスで失敗枚数もかなり出ます。そこで、20年くらい前から、既製品ソフトの「筆ぐるめ」というので作り始めましたが、私はパソコンにあまり強くないのでこれでも結構間違い印刷などが出て作り直しが多かったし、特に写真を入れたり絵を入れたりすると面倒で、こういうのはさっぱり上手になりません。作るのに疲れてしまい、いつも年賀状作成の季節になると、またあれで苦労するのかとうんざりしていたので、7～8年前だったか、「年齢のこともあり、年賀状は今回を持ってもう止めます、悪しからず」と、ある年の年賀状で早々に宣言してしまいました。

ところがこっちが辞めても、以前から賀状を交換していた多くの方々からは翌年からもどんどん続けて来るので困りました。結局はかなりの方にはまた出すはめになり混乱。(義理とか情性で出していた人のかなりを中止することには成功して、出す枚数は相当減りましたが。)

もう一つ悩ましいのは、「喪中につき新年のご挨拶を失礼させていただきます」という年賀中止の予告挨拶状のハガキの問題です。大体は前年の11・12月ごろに届くもので、私は一度も出したことはなかったのですが、実は今回は私自身がこれを出さなければいけなかった、と言うのは、弟が昨年2017年の1月早々に亡くなっていたのです。しかし、私はうっかりして2017年年末には

この喪中につきハガキを出していなかったのです。友人の中には勇ましい人がいて、「恒例により、お正月がおめでたい人にも喪中の人にも、年に一度の近況報告を申し上げます。」と全然習慣を気にしないで誰にでも年賀を出す人もおり、私はこれもいいのではないかと、思うようになってきました。また実際に、「家内の兄が93歳で亡くなったので一云々」とか結構遠縁のお会いしたこともない方の逝去報告をお知らせ頂いても、こちらはしようもないなという感じもなくはないですね。

一方で年賀状取りやめの良し・悪しでいえば、実はさらに発見したことです。年を重ねた年齢になると、年賀状は実はお互いの生存通知でもあるということでした。つまり、あの方、あの方はまだ生きておられるのかな、となった時に、年賀状が続けて来ていけば、まだ生きておられると判断でき、来なくなったときはどうも重病か、亡くなられたのか、なにか重大な変化が生じたらしい、という判断ができるのです。また亡くならなくとも、重病の場合、自筆書き込みの字がまともに書けていないなどでこれは何かあったぞ、かなりひどい病気だと推定できるし、奥さんの代筆になったなどでも近況が判断できるのです。

たまたま、昨年ある友人とこの問題で雑談していて、共通の友人である或る九州に住む古い友人から「今年は年賀が来ないな」という話になり、その男はすぐ九州の友人に電話したら、奥さんが出られ、「夫はいま寝たきりの病人なんです」と答えがあったというんです。そういう意味では、年賀状交換すること自体が生存報告として非常に役立っていると言えるでしょう。私も、高校時代以前の或る古い友人からいつも来る気の利いた年賀状が、ある年から

来なくなったので、すぐ電話してみたら、奥さんが出られ、「主人が寝たきりなので、でもベッドで電話できます、電話機を回しますから話してみてください」となり、本人と話して納得したことがあります。今年も来なかったのですが、なにか気が重くて電話もしていません。



文庫のスタッフだった秋吉父子の、福岡からの年賀状です。早いですね、中3と小6だった兄妹が、春には、もう高3と中3です。



築80年、銀座の奥野ビル：写真ではわかりませんが、堅固でおしゃれなレトロ。若い友人のちょっとした画廊があります。エレベーターの開閉が手動式でした。

1月中旬の日曜日の屋下がり・歩行者天国銀座3丁目猫風景





## 18年1月に入った子どもの本

### 絵本

『なきたろう』(松野正子作 復刊ドットコム 2017)ID12616

『ふるいせんろのかたすみで』(チャールズ・キーピング作 ロクリン社 2017) ID12617

『わたしたちのたまねぎーたねをめぐるいのちのおはなし』(キャスリン・O・ガルブレイス著 ウェンディ・アンダスン・ハルパリン絵 梨木香歩訳 のら書店 2017) ID12618

### 紙芝居

『しっぺいたろう』(津田真一脚本 田島征三絵 童心社 2017)ID12619

### よみものほか

『図書館につづく道』(草谷桂子著 子どもの未来社 2017) ID12620※著者寄贈

『ひかり舞う』(中川なをみ著 ポプラ社 2017) ID12621

『図書館にいたユニコーン』(マイケル・モーパゴ作 徳間書店 2017) ID12623

『プーカの谷 アイルランドのこわい話』(渡辺洋子編・訳 こぐま社 2017) ID12622

### 寄贈本 ありがとうございます♡

文庫になかった児童書の古典と言われる、ぜひ読んでほしいおすすめ本をたくさんいただきました。すこし、古い本ですが、ぜひ読んでね!

『スプーンおばさんのぼうけん』(アルフ=プリヨイセン作 大塚勇三訳 学研) ID12595

『スプーンおばさんのゆかいな旅』(アルフ=プリヨ

イセン作 大塚勇三訳 学研) ID12596

『おしゃれなパリのプチ・チョコラ』(ゴシニー作 サンベ絵 ささもとたかし訳 美神館)ID12597

『アルバート』(オーレ・ロン・キアケゴ作・絵 岡崎晋訳 さ・え・ら書房)ID12598

『人はみな草のごとく—ブラムス物語』(ひのまどか著 リブリオ出版)ID12599

『熊とにんげん』(ライナー・チムニク作・絵 偕成社)ID12600

『青い城』(L.M.モンゴメリ著 篠崎書林) ID12601

『すばらしいフェルディナンド』(ルドウィク・J・ケルン作 内田莉紗子訳 岩波書店) ID12602

『ラスムスクン英雄になる』(アストリッド・リンドグレーン作 岩波書店) ID12603

『偉大なワンドゥードルさいごのーびき』(ジュリー・アンドリュース著 岩谷時子訳 TBS プリタニカ) ID12604

『ぼくは王さま』(寺村輝夫作 理論社)ID12605

『木かげの家の小人たち』(いぬいとみこ作 福音館書店) ID12606

『はらぺこおなべ』(神沢利子作 あかね書房) ID12607

『ヌーチェのぼうけん』(神沢利子さく 赤羽末吉え 理論社) ID12607

『ねこのほんおどり』(佐藤さとる文 村上勉画 あかね書房) ID12609

『星からおちた小さな人(コロボックル物語③)』(佐藤さとる著 講談社) ID12610

『豆つぶほどの小さいいぬ(コロボックル物語②)』

(佐藤さとる著 講談社) ID12611

『ちょうちん屋のまます』(斎藤隆介作 滝平二郎絵 理論社) ID12612

『ペロ出しチョンマ』(斎藤隆介作 滝平二郎絵 理論社) ID12613

『立ってみなさい』(斎藤隆介作 滝平二郎絵 理論社) ID12614

『ぼくらは機関車太陽号』(古田足日著 久米宏一絵 新日本出版社) ID12615

### ★ ★ ★ ★ ★ 子どもの本の選書について

沙羅の樹文庫では、子どもたちが、おかあさんたちが思い思いに、棚から読んでみたいと思う本を引っ張り出して借りていくと思います。

文庫に入れる本は、西村が書店や児童書の選書眼に長けた専門家に教えてもらったりしながら勝手に選ばせてもらって購入したり、寄贈いただく本の中からやはり選んでいるのですが、見逃す本も多々あり、誰かに教えてもらうこともあります。それでもたくさんの出版物から、沙羅の樹の子どもたちにぜひ読んでほしい本はたくさん入れています。だから、小学校、中学校の間に、たくさんたくさん借りて読んでください。

さて、購入以外にたくさん寄贈してくれるのが広瀬おばさんです(2月もたくさんいただきました)が、昨年、ある方から古い児童書を本当にたくさんいただきました。やっと整理ができて今月棚に並べます。右の緑で書かれた本たちです。古びていますが汚れてはいません。そして今では手に入らない素晴らしい本ばかりです。おかあさん、ぜひ子どもさんに読ませて、あるいは読んであげてください。リクエストも出してみてね。

★ ★ ★ ★ ★

## 18年1月に入ったおとなの本

### フィクション

『おらおらでひとりいぐも』(若竹千佐子著 河出書房新社 2017)ID17326

『ふたご』(藤崎彩織著 文藝春秋 2017) ID17333

『いのち』(瀬戸内寂聴著 講談社 2017) ID17327

『火定』(澤田瞳子著 PHP 研究所 20)ID17) ID17328

『百貨の魔法』(村山早紀著 ポプラ社 2017) ID17329

『光の犬』(松家仁之著 新潮社 2017)ID17330

『日蝕えつきる』(花村萬月著 集英社 2016)ID17331

『カノン』(中原清一郎著 河出書房新社 20)ID17332

『旅の終わりに』(マイケル・ザドゥリアン著 小梨直訳 東京創元社 2017) ID17334※映画化

『ソロ』(ラーナー・ダスグプタ著 白水社 2017) ID17335

『アレクシスあるいは空しい戦いについて』(マルグリット・ユルスナール著 白水社 2017) ID17336

『ノーラ・ウェブスター』(コルム・トビン著 榎木伸明訳 新潮社 2017) ID17337

### エッセイほか

『バテレンの世紀』(渡辺京二著 新潮社 2017) ID17338

『小林秀雄 美しい花』(若松英輔著 文藝春秋 2017) ID17339

『活動報告 80年代タレント議員から162万人へ』(中山千夏著 講談社 2017) ID17340

★この著者(『旅の重さ』素久鬼子)が懐かしくて… 買い求めました。文庫の方のお好みではないかな?

『いっしょうけんめい—素久鬼子作品集』(幻冬舎メディアコンサルティング 2016)ID17348

『冥途の季節』(幻冬舎メディアコンサルティング 2015)ID17348

『大地の子守歌』(筑摩書房 1974)ID18349

『旅の重さ』(筑摩書房 1974)ID18350

※子どもの本で『鬼の子ろろ』(在庫)もぜひ!

『クリスマスフロスト』(R・D・ウィングフィールド著 芹澤恵訳 東京創元社) ID17346

『地下鉄のザジ』(レーモン・クノー著 生田幸作訳 中公文庫) ID17315

『園芸家の一年』(カレル・チャペック著 飯島周訳 平凡社ライブラリー) ID17316

『遺言』(養老孟司著 新潮新書 2017)ID17341

『兼好法師 徒然草に記されなかった真実』(小川剛生著 中公新書 2017) ID17342

『老人の取扱説明書』(平松類著 SB新書 2017) ID17343

『戦争調査会—幻の政府文書を読み解く』(井上寿一著 講談社現代新書 2017) ID17344

『不死身の特攻—軍神はなぜ情感に反抗したか』(鴻上尚史著 講談社現代新書) ID17345

『絵本屋の日曜日』(落合恵子著 岩波書店) ID17325

### 文庫

『恨み残さじ(空也十番勝負 青春篇)』(佐伯泰英著 双葉文庫) ID17317

『老いと収納』(群ようこ著 角川文庫)ID17318

『読書の腕前』(岡崎武志著 光文社知恵の森文庫) ID17319

『関ヶ原 上・中・下』(司馬遼太郎著 新潮文庫) ID17321~3

『毒笑小説』(東野圭吾著 集英社文庫)ID17324

『最貧困女子』(鈴木大介著 幻冬舎新書) ID17320

さ・らのひとりごと  
大人の会員がどんどん増えて、子どものための図書館は看板をおろさねばならないかと、考えてしまうことがあります。ともかく、児童書と一般書がほとんど同数、併せて15000冊になりました。一般書は、新聞2紙の書評や出版社のリストから面白そうだな、誰かは読むだろうな、というものを入れています。リクエストも結構受けています。この本をあと2年半で文庫を閉じたとき、どうしようか。元気なら、目が見えるなら、日がな一日ゆ〜っくり、読書三昧だあ——です。いつも書評を寄せてくださるOさんが、いい文化センターになりましたね、と言ってくださり、いいスタッフに恵まれ、皆さんもそこそこ喜んで本を借り、おしゃべりをしていってくださいるけど、時々しんどくなることもあります(自分で勝手に始めたけれど)。いつまで、通って来れるかなあ、と。カンボジアで子どもたちに本を手渡している若い女性に「幸せとは?」と取材記者が尋ねたら、「一生懸命努力して、その先にあるもの」と答えてました。それなら、毎月、文庫開始までは私の仕事、開いたら私は脇役で、みなさんの楽しい様子を喜んで過ごしましょうと、気持ちを楽に。閉館のあとの楽しみを考えながら今年も元気で! とひとりごちます。



『未成年』（イアン・マキューアン著 村松潔訳 新潮社 2015年）

——成熟とはなにか？——

「フィオーナ・メイは高等法院の裁判官である。と同時に一人の生身の女であり、六十歳を間近に控え、忍び寄る老いははっきりと意識せざるをえない一個の人間でもある。裁判官という仕事から、表面には表さないようにしているものの、彼女は日々、混乱したさまざまな感情に弄ばれる思春期の少女のような心を隠し持っている」（訳者あとがきより）。小説の舞台はロンドン。裁判官のフィオーナは思春期に激しい恋に落ち伴侶となるジャックと結婚し三十五年になる。こどもはいない。野心がありすぎて、こどもを持つ選択肢を捨て裁判官としての出世の道を選んできた。初老を迎えてまだ肉体的な衰えを感じさせない地質学者の夫が、統計学者である若い女メラニーとの情事を認めてほしいと言い出した。フィオーナは忙しさのあまり、愛の営みからは遠ざかり、億劫になっていた。しかし、夫は「年老いてそれが不可能になる前に、最後にもう一度エクスタシーを味わいたいから、若い女との関係を認めてくれ」と身勝手なことを言う。自尊心を傷つけられたフィオーナは“出て行って”と夫をアパートから追い出し鍵を取り換え夫を締め出してしまふ。心は乱れに乱れて、裁判の判決文に集中できないほどだ。

そんなとき、白血病の少年の裁判問題が起きる。「エホバの証人」の信仰を理由に輸血を拒否する

17歳の少年アダムとその両親に対して、病院側は本人や両親の意志に反して輸血する許可を裁判所に求めてきた。病状は極めて深刻で時間がない。フィオーナは異例ではあるが、少年本人に会って話を聞くことにする。少年は衰弱しているものの美しく、知性のひらめきがあり判断能力もある。18歳になっていけば裁判所は本人の意志を尊重しなければならないのだが、彼は17歳である。「エホバの証人」が他人の血液を拒否する根拠は、創世記、レビ記、使徒言行録などに記されている「血は決して食べてはならない」（レビ記3章17節）という箇所を“体内に他人の血を取り入れてはならない”と独特の解釈をしていることによる。これは良いとか悪いとか、議論しても答えの出る問題ではない。フィオーナは過去の判例と自分の決断により児童福祉の観点から病院側の意見を採用し輸血を認める。彼らが「エホバの証人」の共同体から非難されようと少年を救う方を優先した。最初は死ぬ覚悟をしていた少年は結果的に元気を取り戻しフィオーナとの病室での一回限りの精神的な交わり、一瞬の濃密な出会いにより、彼女の虜になってしまう。そして彼女との生活を夢みるようになるが、フィオーナは自分の社会的な立場や利害を考え、彼に魅力を感じながらも、世間体から、その求めを受け入れられない。若い女に捨てられ戻ってきた夫と、微妙なバランスをとりながらも、もとの穏やかな生活を取り戻す。少年は絶望し白血病が再発して、今度は本当に輸血を拒否してしまう。一度は救うことのできた彼の命は…。

命と信仰、老いと若さ、中年夫婦の危機などをテーマとした、いかにもイギリス的な物語。タイトルの「未成年」の意味は、小説の主役たちが成熟した大人ではなく未成年という意味なのか。最後までわからなかった。



旧友っていいものですね

昨年4月にたまたま旭川動物園にペンギンを見て、そこに住む古い同僚と再会し、書評を寄せてもらってもう半年以上。彼女は、仕事柄(図書館へ送る本の書誌データを作る人で目の前を常に様々な新刊が通り過ぎてゆく)以上にもともと読書家でした。いつもネットで検索して、文庫にある本の紹介してくれるのですが、彼女の最近のおすすめを下記しておきますね。今年も森林浴さんと一緒に亜子さんにもたくさん寄稿してもらいます。

- 『光の犬』(松家仁之著)
- 『人の昏れ方』『カノン』(中原清一郎著)
- 『Gの残影』『神の子の密室』『ムガールの密室』(小森健太朗著)

※光の犬、カノン は今月入れました。



古巣の雑誌『図書館の学校』から

選者は、海の日のおはなし会のとりを語ってくれている佐藤涼子さん

- 『手おけのふくろう』(ひらののぶあき文 あべ弘士絵 福音館書店)
- 『こぶたのピクルス』『ピクルスとふたごのいもうと』(小風さちき文 夏目ちさ絵 福音館書店)
- 『珍獣ドクターのドタバタ診察日記』(田向健一著 ポプラ社)
- 『いのちは贈りもの』(フランシーヌ・クリストフ著 河野万里子訳 岩崎書店)

2017年に読んで心に残った本を何人かの方に教えていただきました(あくまでも個人的なものです。そして新刊にはかぎりません)。同感する方、また読んでみようと思う方、参考までに。楽しい本、心をつつ本、考えさせられる本、暮らしを豊かにする本、欄で待っていますよ。18年はどんな本に会えるでしょうか

『魔女の宅急便』(角野栄子作 福音館書店)：ママ ※根強い人気。おかあさんに人気があるのですね。以前もT君ママが愛読していました。

『ばあばはだいじょうぶ』(楠草子作 童心社)

『かぜ』(オルセン作 亜紀書房)

※『ばあば』はNHKで作者がこの本がなぜできたかを話していましたね。オルセン作は『つきのぼうや』だけで、この絵本は文庫にありません。訳者と出版社が変わって新しく出たのですね。Hちゃん、教えてくれてありがとう。 Uさん母子

『九月に』ID17041～2 『シェルシーカーズ』17051～2(ロザモンド・ピルチャー著 朝北社)

『湖畔荘 上下』(ケイト・モートン著 東京創元社) ID17269～70 Kさん

※ピルチャーの本はまだあります。人は人のつながりの中でしなやかに生きている。自然と人物の描き方が秀逸。『湖畔荘』は12月入庫。

『檀』(沢木耕太郎著 新潮文庫)ID16089 Tさん

※着眼点がすごいと評判でした。Tさんは小説よりノンフィクションや人物評伝がお好き。

『陸王』(池井戸潤著 集英社)ID16779

『ツバキ文具店』(小川糸著 幻冬舎) ID16779

※2冊ともよく読まれた本でしたね。

『ノボさん』(伊集院静著 講談社) 15388 Aさん

※昨年もどなたかがお薦めでした。

『マチネの終わり』(平野啓一郎著 毎日新聞出版)ID16748

『満つる月の如し』(澤田瞳子著 徳間書店)9219 Y.T.さん

※今月、澤田さんの新刊入りましたよ。

『君のためなら千回でも』ID7477～8 『千の輝く太陽』ID15465(カーレド・ホッセイニ著 早川書房)

※インドで風揚げした思い出ありと。 Kさん(男性)

『人生にはやらなくていいことがある』(柳美里著 KKベストセラーズ)ID16950

『聯合艦隊司令長官 山本五十六』(半藤一利著 文藝春秋) ID9029

『夜の谷を行く』(桐野夏生著 文藝春秋)ID17069

『キャスターという仕事』(国谷裕子著 岩波新書) ID17029

『たとへば君一四十年の恋歌』(河野裕子・永田和宏著 文藝春秋)ID15098 R.K.さん

※様々なジャンルの本をあげてくださいました。

★ ★ ★ ★ ★

寸評も添えて

『海辺の生と死』(島尾ミホ著 中公文庫)ID15237  
◎『死の棘』の著者・島尾敏雄夫人が生まれ故郷奄美で過ごした幼い日の記憶がみずみずしくまるで昨日のここのように書かれている。

『清冽- 詩人茨木のり子の肖像』(後藤正治著 中央公論新社)ID7834

◎詩人・茨木のり子その人が浮かびあがるようだ。著者の力量に脱帽。彼は「天声人語」の名執筆者・深代惇郎さんの評伝も書いている(ID15902)。

『また桜の国で』(須賀しのぶ著 祥伝社) ID17002

◎ポーランドという国がこんなにも外国から侵略された歴史を持つ国とは、この本を読むまで知らなかった。 R.M.さん

『ファニー-13歳の指揮官』(ファニー・バン=アミ著 伏見操訳 岩波書店)ID12535

◎ヒトラー政権下、フランス人によって保護された少女が、孤児院から、十数人の仲間のリーダーになって、スイスにたどり着く実話。(映画化された)

『歴史の証人 ホテルリッツ一生と死、そして裏切り』(ティラー・J・マッシュエ著 羽田詩津子訳 東京創元社)ID17185

◎ダイアナ妃が事故死する直前まで滞在していたパリのリッツホテル。現在に至るまでの歴史。

『憎むのでもなく、許すのでもなく-ユダヤ人- 育検査の夜』(ボリス・シリユルニク著 林昌宏訳 吉田書店)ID15653

◎フランスに生まれたユダヤ人。5歳で孤児となり、奇跡のような偶然の出来事に助けられ、生きのびて精神科医になった。平和な今、その心境を語る。3冊とも戦争に翻弄された話。私は、少しでも歴史の、戦争の裏側を知りたいと思い手に取った。

M.F.さん

『黒グルミのからのなかに』(ミュリエル・マンゴ-作 カルメン・セゴヴィア絵 ときありえ訳 西村書店)ID3589

◎お母さんを迎えにきた死神をポールはグルミの殻に閉じ込めてしまう。その時から世界に変化が…。民話をもとにしたこの童話は、生まれいずるものの永遠のテーマ。

『イトウの恋』(中島京子著 講談社文庫)ID16726

◎私の好きな中島さんだが、これは、『日本奥地紀行』に同行した通訳の青年イトウをめぐるフィクション。古典を、別の人物の目で書き直したスタイル。これも、ああ、おもしろかったとおすすめ。

『霧のなかの白い犬』(アン・ブース著 杉田奈々枝訳 あかね書房)ID12497

◎認知症を患い始めた祖母は、ナチスの歴史を自分の中から消していた。ジェシーのまわにある移民・失業・友情などの問題と、運命の偶然の末に訪れるゆるし、とは。 H.Y.さん

『もちろん返事をまっています』(ガリラ・ロンフェテル・アミット作 母袋夏生訳 岩崎書店)ID218

◎ティーンエイジャーの男の子と女の子の文通を通じて繰り広げられる物語。明るくのびのびした女の子ノアと、脳性マヒで手足が不自由なドゥッティ。互いの暮らしの違い、悩み、気持ちを交わす。ふたりの本音のやりとりが瑞々しい。『雪あらしの町』(ヴァージニア・ハミルトン作 岩波書店)ID70も高学年、そして大人にもおすすめしたい。